

「てらこや塾」——伊勢・慶蔵院の挑戦

「駆け込み寺」が起点

神社本庁の本宗・伊勢神宮のある伊勢市には、もちろん多くの寺院もあるが、慶蔵院はその一つ。近鉄・伊勢市駅の西北、松阪寄りに2駅目の小俣駅から歩いて5分ほどのところにあるお寺だ。1594年の古地図に慶蔵庵なる表記があるものの、洪水で流され、1685年に再建されるも、その後、本堂がまた洪水で流され、再建し…という歴史をたどってきた寺だ。

前島格也さん（60歳）が、この慶蔵院の第25世住職に就いたのは2005年。32年間、高校で社会科の教員をし

てきたが、前島さんの父親である先代の住職が病氣療養となつたことから55歳で職を辞し、跡を継いだ。

その前島さんの今の活動のきっかけは、8年前に中国から来日した両親がようやく定住の目途をつけ、本国から呼び寄せたばかりの一人娘・中学生Tさんの高校受験の相談を08年3月に受けたことにある。中国人の母親が時々挨拶をかわしていた隣人のおばさんに、日本語が出来ないために推薦入試を不合格となつた娘のことについて「助けてほしい」と相談したのだ。「それなら、慶蔵院の住職は高校の先生だつたから…」と慶蔵院に母親を連れてきたのが発端だつた。地域の悩みを受け止める「駆け込み寺」となつ

たことが、そもそものスタートとなる。

縁が縁を呼び活動開始

日本語がほとんどできないTさんが高校に進学するのは無理だと、前島さんは最初、中学での留年を勧めたが、数学などが得意だつたTさんは昼間定時制県立高校の午前の部に見事合格。しかし、合格はしたものの、授業についていくには日本語能力の大幅な向上が不可欠だつた。

そこで伊勢市国際交流協会

で活動している知人に相談したこと

がきっかけで、日本語教育の専門家、市橋たね子さんら4人の日本語教師が協力してくれることになった。こうして08年3月、前島さんらがTさんの日本語学習を財政的に支援する「小俣町日本語支援グループ」を作り、他家をはじめ広く市民に年間一口千円の協力依頼を始めるとともに、市橋さんを代表に日本語教育を進める「慶蔵院日本語サポートの会」を結成。慶蔵院の「二会館」で、



放課後を利用したTさんへの無償の日本語指導が始まった。教師たちへの謝礼は、60分授業を千円と定めた。

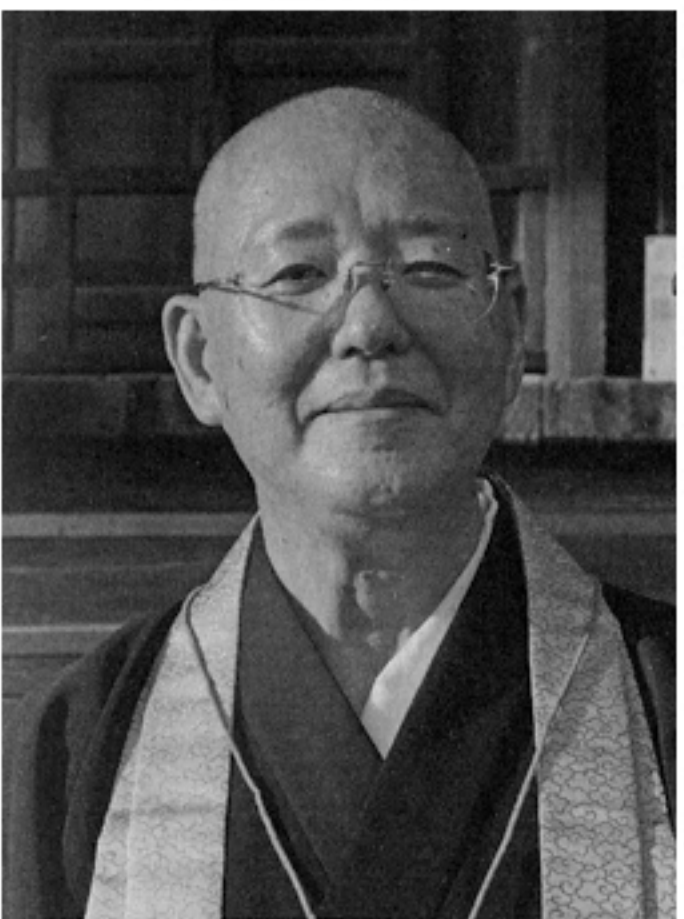
やれないなら、やってみせる

活動が始まると、その広がりも早かつた。5月にシンガポール生まれの高校留学生Nさん、9月に中国籍の小学4年生Fさん、11月にフィリピン籍の小学1年生Cさんと中国籍の小学6年生Sさん…と、入塾者がどんどん増えていった。

その塾生の一人、小学4年生のFさんが、学級内で担任も加わって5、6人の児童から「日本語が分かつているのにルールを守らない」と追及を受ける事件が起こつた。前島さんらは学校に善処を求めたが、担任教師は父親に「この子は、なぜ日本に来ていないか、なぜ日本語を学ばなければならないのかわかっていない。ちゃんとわからせてほしい」と言い出す始末。

「批判だけじゃダメだ。やって見せるしかない」と、前島さんらはすでに県内7市の自治体で実施されていた「初期適応指導教室」を独自に実施することにした。この教室は、来日後間もない外国人児童生徒に、一定期間集中して日本語等を指導する場で、教室への出席は、在籍している学校の出席とみなされる。こうして教育委員会の承認を得て09年1月から伊勢市内初の「初期日本語学習支援教室」を月曜から金曜まで午前中に実施することになった。

09年1月、その母体として、これまでの活動を整理し、前島さんを代表とする「NPO日本語支援「てらこや塾」」を立ち上げ、「小俣町日本語支援グループ」と「慶蔵院日本語サポートの会」は、「てらこや塾」を支える車の両



前島格也さん（てらこや塾代表）

輪と規定した。

その後、塾では常に4、5人の子どもたちが学び、日本語教師からマンツーマンの指導を受けるようになった。学習コースも、初期日本語学習支援教室の他、放課後は日本語教室と教科学習支援、ここに参加できない子どものための講師派遣も行うようになった。

活動がさらに広がる

09年度に入り、「てらこや塾」活動の充実と活動資金の確保を目的に、フリーマーケットに参加。10年5月には、前島さんの以前からの知人で、社会的テーマに関わる歌手活動に取り組むシンガーソングライター・横井久美子さんのコンサートや「童謡を歌って学ぶ日本語と日本の文化のワークショップ」を慶蔵院で開催。さらに浄土宗「共生・地域文化大賞」助成部門や伊勢市からの助成金を得て、

活動を支える年間収入も80万円ほどになってきた。

そして10年度、活動のフィールドがさらに広がる取り組みが始まった。

一つは「てらこや塾」のスタッフである青年が、自らアスペルガー症候群（注3）であることを自覚。その自覚によって、就職後の不応や離職といった、それまでの「生きづらさ」から解放された経験がメンバーの間で共有されたことだ。そこで「AGEEの会」（AGEはアスペルガー・グループ・エンジニアの頭文字）を設立し、学習会などが始まった。

そしてもう一つ。「てらこや塾パート2」という形で、日本人への学習支援活動が始まった。この学習支援の対象となる基準は、なんらかの形で「困っている」こと。特定の障害があるかないか、あるいは所得の多寡などで線引きする基準は設けておらず、かつ授業料は無料だ。

寺からの発信が地域を変える

また、09年12月に歌手の横井さんがベトナム・フエで、「童謡を歌って知る日本語と日本の心」のワークショップを実施し、つづいて今年の3月のワークショップに塾のメンバーも参加したことをきっかけに、ベトナムの中学生を日本に招き、日本語学習を支援する構想が立ち上がった。そこで、5月、この取り組みを支援する「スカラシップの会」が「てらこや塾」の活動の二つに加わった。来年6月から8月、ベトナムから子どもたちを招き、檀家との交流をしてみようという計画を進めている。

「お寺からの発信は、私たちのような地域では受け入れられやすいんです。一定の社会的信用力もあるし、「住職が言っているのなら…」となりやすい。この前も散髪に行ったら、「私が子どもたちの散髪をボランティアですよ」と言ってくれたり。ベトナムの子どもたちとの交流が始まれば、檀家が変わる。そうすれば、地域が変わります。だって、人の役に立てることほどの喜びはない。そのことを実感して下さる方が広がっていくのですから…」

前島さんは自信をもって、こう語る。実際「てらこや塾」には、企業戦士として家庭も地域も二の次だったのに、退職後、「てらこや塾」に生きがいを見出し、学習支援に大活躍している人がいる。

今回、紹介した取り組み以外にも、多様な活動が慶蔵院を舞台に広がっている。お寺が、地域の市民活動の拠点としての役割を果たしている姿が、そこにある。